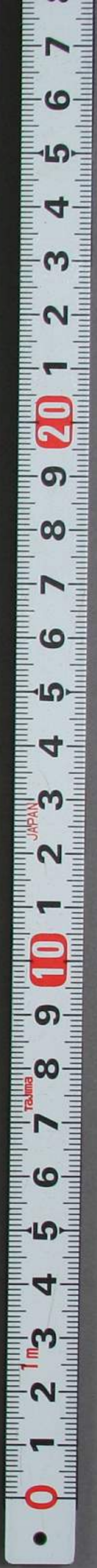




紀伊國名所圖會 三編

三之卷
伊那郡
那賀郡
那智郡

ル 4
1833
13



丁 4
1833
卷 13



紀伊國名所圖會之編卷之三目錄

伊都郡賀兩郡川南

- 野上八幡宮
- 箕子橋
- 生石峯
- 極樂寺
- 大藏社
- 荒川郷
- 美福門院墓
- 秘文瀧
- 龍門山古城壩
- 桂谷
- 麻生津渡口
- 四村郷
- 小川郷
- 伊勢街道
- 星河
- 大日寺
- 荒川戸畔故居
- 興山寺
- 善通寺
- 飯盛山
- 麻生津峠
- 星河村
- 八幡宮
- 逗留宮
- 丹生高野神社
- 調月氏裔
- 塩谷伊勢守墓
- 御船明神
- 最初峯城跡
- 茶白山
- 麻生津郷
- 志賀谷郷
- 御所
- 笠石
- 明王寺
- 生面
- 妙法壇
- 市場村
- 友淵越
- 龍門山
- 鎌倉谷
- 九頭社
- 満願寺瀧

雅真僧都墓

蟻通明神社

志富田氏

皮張明神社

皮張石 烏帽子石

百合野明神 琴御前

鑊八幡

酒殿明神社

慈尊院

旗掛松

善名稱院

真田抜穴

學交路村

丁田村

清水村

二軒茶屋

岐阜中納言秀信卿墓

上田三郎文忠守

上田播磨守墓

糸の細道

谷奥深村

志賀谷筋

志賀野郷

畠山高政末裔

釜瀧薬師

丹生七社明神社

真國郷

丹生高野神社

天狗石

細野郷

勝谷峠

大宮

友淵郷

妹背庄司末裔

小原淵

友淵八幡宮

志賀郷

下司末裔

丹生高野神社

大橋

梨木峠

花坂

長谷谷筋

神野郷

河野城壙

十三社明神

藏王権現社

満福寺

金剛寺

猿川郷

熊野十二社権現

田村將軍石塔

毛原郷

烏帽子岩

朝日寺

丹生高野神社

立石

祝詞石

長谷郷

神山

産土神社

北又郷

若子岩

黒子峠

摩尼郷

杖藪

傳供本

的場山

陣ヶ峯

櫻峠

宿の温泉

筒香郷

雨乞峯

七霞峯

藤白峯

明神岩

富貴郷

名迫明神社

湯川郷

天狗嶽

花園郷

大滝村

大滝

佐久間信盛故居

築瀬皮

新村



廣隆



野上
小畑八幡宮
例祭八月十五日
殊に嚴整あり

か
し
ら
び
て
ま
ん
ま
ら
や
あ
ら
ま
あ
ら
ま
あ
ら
ま

紀三輪三ノ二

橋子に養



近郷乃諸人神靈を仰ぐことにおに十倍して持幣此
 士民雲の如く集り寄附の田園日々小聚くくつ小
 南小乃兵乱以来根来の僧院礼送の時社殿忠厚焼と
 とありて傳記書一も存するそのなく後又神を普請供
 僧乃家石清水より此補任状書を傳ふの兵燹の後永
 禄年中に近江國真賢上人といふ僧當社の衰廢せると
 歎き去人を誘ひて再興乃功速し就てうばや右の
 さをを造しを慶長年間より社料も恙子河寄
 附ありて今よりありていほもく舊例を志す多し
 當附 神事

小川郷 南に生石岩ありて有田郡より隣り
 八幡宮 小川郷中の本居神なり別當
 寺に在侍あり銘左小記と

養子橋 勅本村より有田郡高野神より通ず御通なり橋の西法をわよ
 神樂堂五人神子二人番頭七人といふ二十九人あり



井口村
帆立松
平野村
祝の松
下津登村
逗多の宮
椋木
薬師寺

紀三編三ノ五

廣隆

金剛峯寺

彌勒院

久安二年月日

笠石 中田村より登りて笠石峯の頂より那賀有田の郡界なり石をどり五十間作長久しそを以て白紋なり

生石峯 妻一く有り田那の跡よりあり

望生石峯

自寛齋

遮斷南天高且團三春餘雪望中寒禮容本向何人是
雲作衣裳石作冠

伊勢街道

勢多郡日守郷より伊勢郡桑名郡有田郡湯淺村より各名郡那賀郡乃湯

逗留宮

下津村伊勢郡の傍にありて應神天皇を祀り八幡文の地

應神山明王寺

井は村領星河の村にありて樓門ありて

極樂寺

同村よりあり

遊井口村宿極樂寺

伊藤弘朝

寂寥山寺晚投宿中柴扉濯垢溪泉近供新野軟肥不

星河

安楽川河原村より星河川

締禪舍契安得吏情稀曉看芬葩落春禽繞宇飛

此河大瀧村明王寺の西より尚る安二二町の間ありて崖削立

く奇石怪岩そりて錯落し其形勢虎乃踞か如く獅

の爪をかく如く或は相圍く潭をたぐる魚ありて突起

して波を裂き清流耳底を浼しむ下流に雙立を成も

のを交輝岩といひまを隣りて石を觀音岩といひ

腹に觀音の靈容ありてり屢々流のぬふ浸没せり

とくも石紋交むりあり上流に危崖を登りて瀑

を成りての成神句麗といひく奇石ありてり

あれをみよむみよむてらづら流る星河の水 木練園

丹生高野西大明神社

丹生高野山よりありて

生面

小笠原村口式藏氏格に氏ハ及不姓にて是家なり文保年中より同族



廣隆

星川

磊々石屋水一壩
源泉混々日兼夜
立筈川上此縱觀
涵得三垣廿八合

無名氏

すゝき

あふれぬ

そとへ

星の影

精細



紀三編三十七

湯沐の邑に賜ふ女院事以大師を信じ給ふて清うて
多野山小六角堂を創建して紺紙金泥の一切経を納免
此地を焼料に充給ふ今此荒川經藏をかり又此地も
大伽藍を造りて尼庵を敷多至て後世を以て給ひし
と女院 帝の遠縁に修して鳥羽乃成菩提院少多所發
爲るに給ふ 帝達紹して後へ給ふる水面の武士七十人
の内眞迹に修るといふの只主人を石具して思ひては
園より給ひ給ひ修禪尼寺此地城隈橋とて常り高
野山を遠ね給ふ所は樹の枝をとると例の小山
此に修給ひ雲井小尼布大塔を造りておとす時を尼
か岡の伽藍に菩提の所新を造りて佛しくりかして永曆
元年十一月廿二日御年四十七に少く南河に給ひし
御遺言によりて玉骨を備後守時通が首より給て野山

に納め佛像を根来寺に奉納し給ふて在中の民も此
どもを修くして寺田といふ事と槐樹を植へて御墓の形
を以て女院の冥福を勤めしむ事も多しとて
明暦の以由良真圓寺に修給ひた尼院を奪ひて修む
に里人ホ地い出り給ふるの僧大に怒り城を造りて惡徒
を率ひ來り遂に火を放りて給ふるも嚴し給ふる會と給
らに燒くといひりとの更近河守ハ女院に修給せし時よ
り此地より修して修書此旨をちり年月を送りしハ
其苗裔に修りても御碑前の回向急げ禪僧おが丸送
を給ふ事いかに修り此州庵を修びて修禪尼寺と号し
今も其家より支配以て意例城守るとして一彼多野
の安楽院よりハ女院の遠忌に修りハ必し寺に來りて備
經し御墓所に奉給婆を建りて例といふ尼か岡の名を以



くつり大塔の礎石八箇の芝生もあひこ逸れり山ハ
取休れ其名のつり玉松の翠もはるかにあそび

院廳下

荒川莊官等

可令早任鳥羽院御使盛弘長承三年

停止田仲吉仲兩莊相論當莊四至內領地事

四至 東限檜橋峯并黒川 南限高原并多須木峯
西限尾岡中心并透谷 北限牛景淵并紀池淵

右彼莊今日日解狀併謹於舊貫御莊建立之後既雖及數

十年全無致如此牢籠之人然閒故鳥羽令崩御之後即恣

押取當御莊內為彼田仲莊領之後漸送年月雖捧數度解

狀無指御沙汰之閒適以去比於院廳被召對決當御莊官

等與彼田仲莊住人等之刻彼莊住人等全依無其理卷舌

無陳方因之當御莊存無限理之處廳御下文未成下之間

紀三編三ノ三

蘭於白河鳥羽兩院廳御下文之所者訴訟之時領家注子
細可經奏聞之由宣旨有限然者何乍見彼綸言猥為田仲
莊預內舍人仲清忝被倒美福門院御領乎殊可垂御還迹
者也望請鴻恩且依先例且任鳥羽院廳御下文速被成下
廳御下文永令停止彼莊異論者當莊塚任御使盛弘注文
四至停止田仲吉仲兩莊異論可為美福門院領狀所仰如
件莊官宜承知依件行之敢不可違失故下

平治元年五月廿八日 主典代右衛門少尉安倍判

別當内大臣兼左近衛大將藤原判

以下連署今畧以

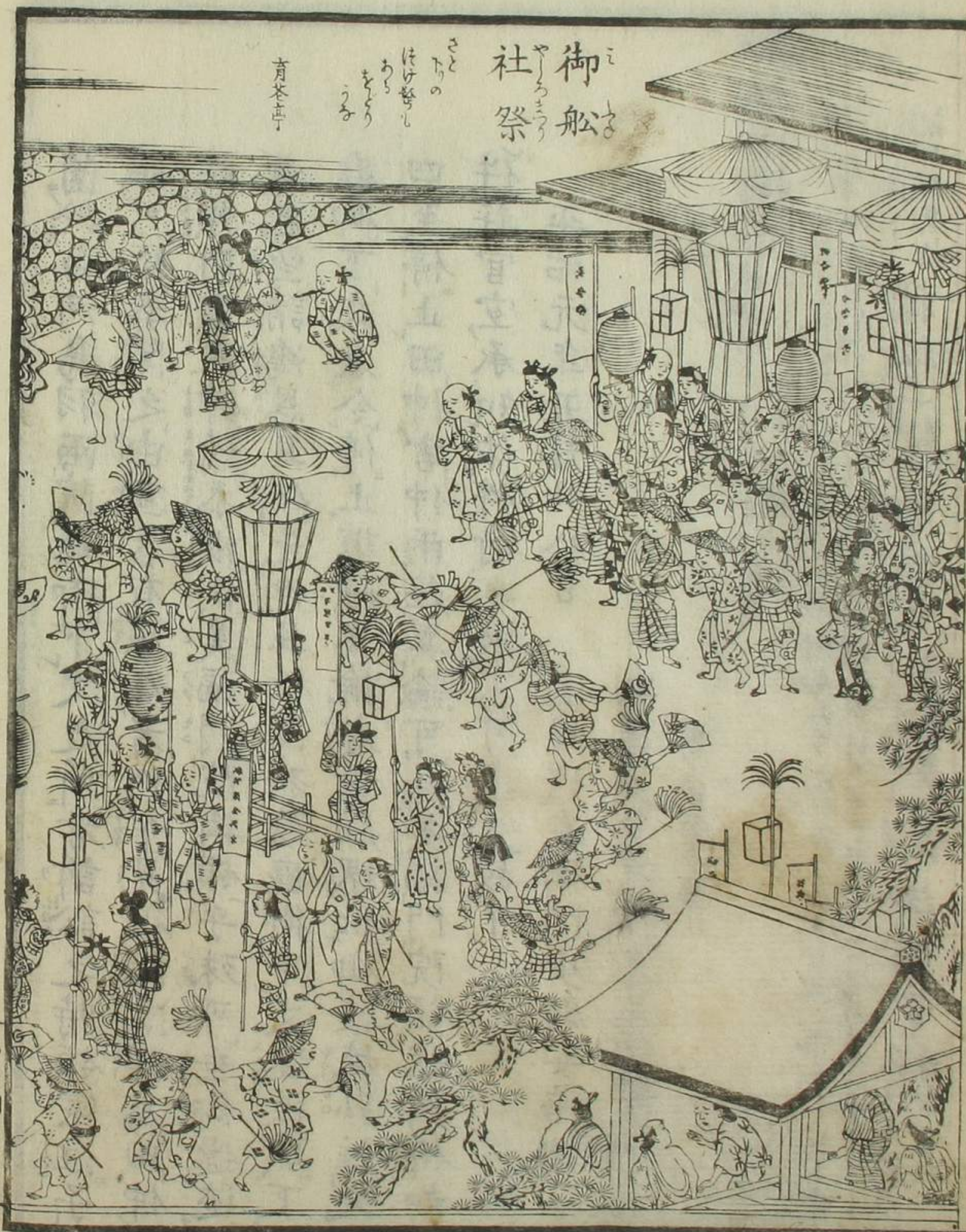
御船明神社御田村より中此氏仲

例祭 正月十一日二月九日九月十一日流儀あり又七月十六日神祭にて氏子中

御影堂 弘法大師乃
攝社二 本地堂 文殊菩薩と云々



廣隆



御船社祭

育水亭

紀三編三十三

神樂所 本社の左 舞堂 本社 神庫 本社 鐘樓 神庫の傍
州國分、幡宮大工重吉文明九曆丁酉十二月一日願主社僧等と
り又傍に紀州安樂川莊三船之宮明應五天五月三日とり
鳥居 丁許
中門 本社 御湯釜 安樂川莊三船御寶前御湯釜 永正十
一年 甲戌九月吉日 □□敬白 ○神寶太刀 二振

三代實錄

清和帝貞觀三年七月二日甲戌授紀伊國正六位上御船

神從五位下

當社に奉國神名帳に載り鎮坐此來由久遠なり天正年
同應其上人再建の棟札に本社に御船明神と記し左右
友社に日城大小神祇并奉國諸神祇の社と記せり近年
説をるはものりて當社の祀神を本玉屋船命とい其
地名の安樂川を以て奉香の轉語と古語拾遺にんえ
る御本奉香といふより後世偽造の神書等小因り
ていひ出を承りたり然も奉香ハ名草詠文郷乃地

紀三編三ノ十四

て尚勅りしつらびもさる川の名既に記紀に見いきてい
や古し何ぞ奉香の祀とせん其説乃誤なりと刻も
一接し皇大神宮儀式帳小御船神社一處稱大神乃御陰
川神形無倭姫内親王代定祝といふもさるる當社もそ
神靈を遷し祀を承り地名をさる川といひ社を御船とい
ふ海を由緒あることありれども古傳絶て考ふべし
よしなれを恨む

友別越 市橋村より溪淵を流るる
秘文流 同村より友別一紙を

拓福川 安樂川 莊に走り清泉を巖に解き
る崩れ二股の瀑布なり唯滝乃例裁とて辨付天乃
小祠を安並に昔雲系と秘文を唱へしより号くを深
布の川邊怪岩刻立しを一を屏風當といふ

夏日遊秘文瀑布

木村晴孝

屏風巖上風塵暑奇石矮松圍碧泓日夜淙淙溪水響
訝聞時唱秘文聲

安樂山遍照院興山寺

上野村 奉尊不動尊

寺内應其上人の本像を女に
上人自作して其容兒せり

○什寶茶壺

上人秘藏乃珠蓋なり一
つ下の什宝皆上人の遺物

水瓶

八角の瓦蓋あり形
圓のてし綴り

瓦蓋

形蓋乃瓦蓋なり
かき綴り

當寺に應其上人の弟子二位公覺業乃因基わり覺業乃
業業を嗜む故を以て上人業業教種を興一々かん

水瓶 底銘

文祿五年霜月吉日

三島大寺宗吉作



高一尺一寸五歩
口徑一尺二寸七歩
四字大十三寸

最初ヶ峯城跡

新田村より南小の谷中十三丁頂平くふして周回二丁
許破石一ヶ城跡の跡あり龍門山の西に在り

城の道

道の東南より毎年七月十日日龍門村の人衆出でて此に
死せし人を葬り火を焚くのがりあり

討死乃人城事火のむらみはるや堂合我 眠 洞

龍門山

絶頂に海苔地ありと傳ふ
仙人の石櫛といふあり

那中第一の後嶺にて上碧落を摩一々噴煙を摩と

百峯其膝下に連うてはるる亭子坐れ丈人を揖と侍が

如し府下より是城をむる形ありも留岳に似る或ハ

紀州富士といふ諸國より若山の凌る来泊するそのむる

らば海上より此標的に次ぐや才腹に勝と村の村より

登るこも才里許巔にありてはるるは是也此山海群の

因りて劉文契名に維翰宮衛氏よりて僕 献帝の後より故ありては山に下
りありて竜門といふは後東都に過ぎる帷をたれく教授以ては服南郭の文と
やくだしは竜門名をよむる長編あり清閑のありたふ録に

哀王孫

對酒纔忘憂醉臥胡姬樓腰挾蒯緱之長鉞身被鷓鴣
之弊裘傍有美髯少年子撫枕喚起請交游願勸一杯

結然諾起坐不辭共獻酬少年殷勤問名姓相君貌得
非名流欲對呻吟不能言長跪數謝不堪論請君劍舞
我擊節賤子開口緩憤魂憶昔東漢綱紀穎董賊跋扈
崩風雷枉害善良鋤雄俊克復難施股肱才劫主遷都
逾僭侈弄權殺人如穰薙廢立萬乘勢回天剪屠龍種
無子遺赫赫兩漢帝王州城闕爲墟傾宗祀密謀斃賊
纔解顏那識蕭牆姦雄起振盪四海據要津神威遂歸
傳國璽王孫狼狽泣路衢海內無所投微軀跼蹐從槎
海東國海東之國日本都日本天子聖明主仁政養老
且撫孤顧眄帝孫恤播蕩禮遇更與諸臣殊詔賜琵琶湖
石鹿郡紫綬新縮金虎符何計異域祭宗社東邦世變
空爲古石鹿胄裔亦流離於今爲庶竄草莽龍顏隆準
赤帝孫城市餽口混屠貼妻拏數嗟甌生塵世人謾指
朝貧窶感念祖宗獨哀號爲遺悲憤賒濁醪君不見漢
祖斬蛇三尺劍千載威靈口噉噉帝王之孫徵何在向
入難說卯金刀

古城墟 山の根腰のくさし

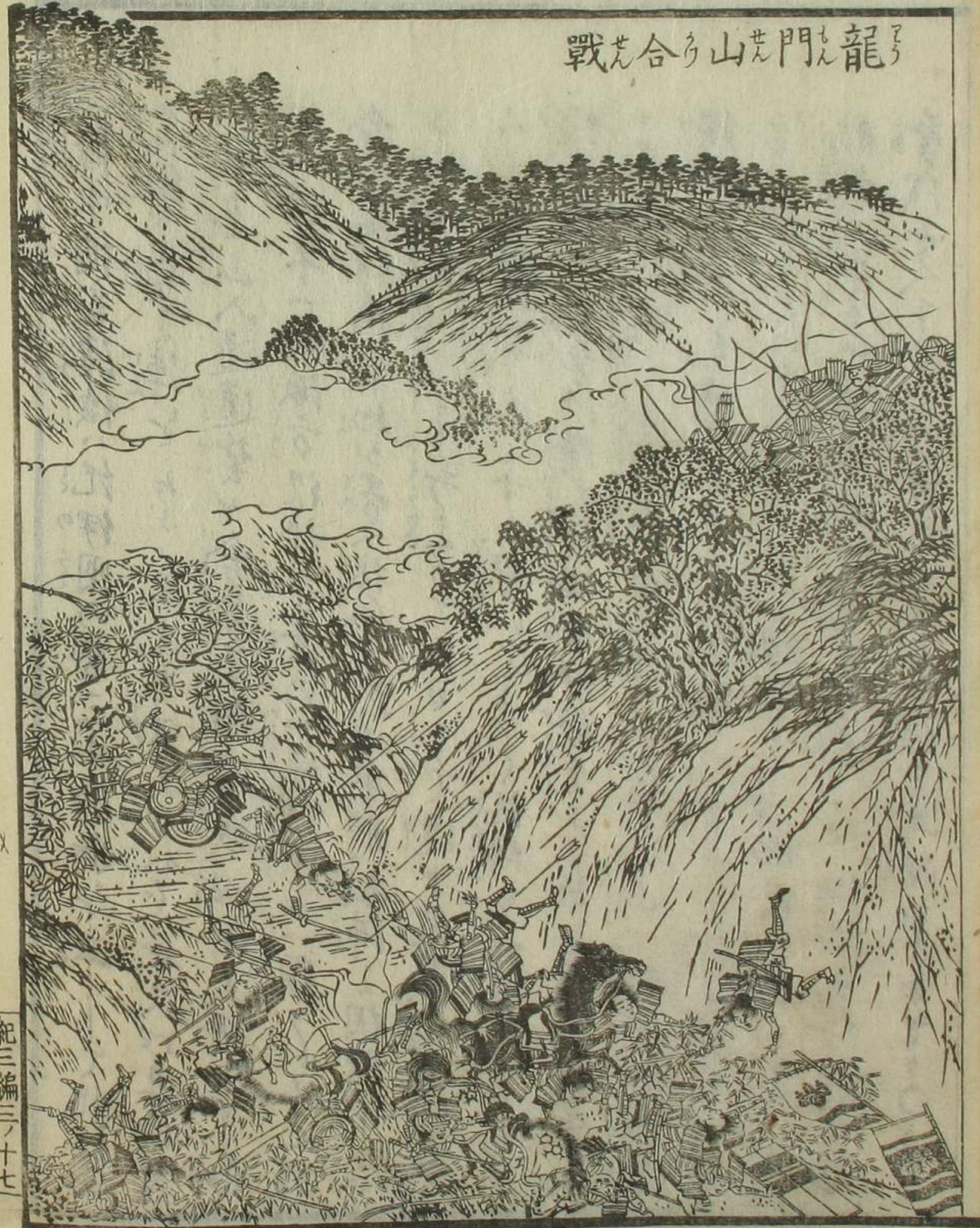
太平記云

一條中納言隆俊、紀伊國の勢二千餘騎を率して紀伊至
名和が峯一陣を多しとす。まゝこれに延文四年四月
三日、島山入道隆盛が舍身尾張守義海を大將あゝ白
旗一揆平一揆源方根部千葉の一族松原が一類これに
合之萬作騎最和が峯へ指し、新世勢別敵陣と相對し、
和佐山一名羊助あり、打ちつて三日まで進中、比先已が陣を堅
くして後小寄んとする勢に、いんてく堀橋を搦ち、是を
怖ん、乃小宮方比侍大將隆盛、伊勢守と兵を引具し、名和
が峯を引退し、龍門山へ我籠り、島山が執事遊佐勘
解由左衛門是城を多しとす、や敵ハ引つて、何くまぐも進
強く打ちつれ、ものもして馳向し、中畧、彼龍門山と申ハ岩
龍領と申りて、踏羊腸を遠より岸ハ松柏深々、れハ虎も固
守、城之下、小篠志が、つて、馬蹄を多て、こころ



廣隆

龍門山合戦



龍門山合戦

されど禁中がいはり今敵おけき雷心を力して坂中
でひけより一段平なり所馬を休め息を終んと弓杖
もろり力を送り突くま小將とて一板楯を簀引
付て野伏ども千餘人東西の尾崎に立渡り乃降かぬ
く敵より射る三百餘騎の兵を繞るれ岩屋へ皆の子打
る振と抄えし中へ下て討たれ二人討つるも
どももづい更に進み強敵んとすま岩石前より
覆いて懸るべし使もか一用敵と合んとされ南
北岩屋に絶く樹をて道もかぬ何せんと背をく
先て引やると引きとや何ととるあり 中界 塩谷伊勢守
と名をて去先と進めを形と山東貴志山平野地牝川
志守津虎乃兵ども二千餘騎大山も崩れ鳴雷の爲に
やく喚叫ぶ掛りたる敵を逐乃のたえと引く此付

兵どもされむなげし一足も支よべし子負を馳んとも
せだ親子の討もをも顧みぬ馬物具を脱捨くとも
と篠原氏とてとをたけらるるもあく二十餘丁進
りける塩谷を領り小治く長進して馬と矢三筋立ち捨
る二所突きたれを馬の足立にて討退むるまより進
ま小將びも塩谷も大伴下小投らるるれはあ付より
して目らと東西り迷ひまるとける所を踏
敵陣りに多さふよりて武器れは内胃を敵に
くれをはく味方なる塩谷遂に討まにたりす時陣の
合戦に生虜六十七人討つるの二百七十三人とぞ
申 同年四月十一日高山武敏と播磨今川伊豫守細河左近將
監去岐宮内少輔小原信中と依木山内判官芳賀伊賀守
去岐松授一揆依木美旗一揆於合を勢七子餘騎をて紀伊

諸人ぞ向れり然中畧去後は二條中納言隆俊にきて大勢
かたより同えしと當年の陣してや戦ふ平場へ進てや
掛合さると評定ありらる湯川庄目を替りして後小
旗を率然野原よりあとも披露し舟を操て田邊よ
り河原れとをせえたり此陣かくていぬ何あえりと東
下城を在しけり城人多き大子の一乃城戸を堅めりけ
る誠智院人よ成る苦賀伊賀者が方へ出りあはさ
づに猛き清堂よりて父よ義をすめりれ今又誠智小
力を付しれり少くも滞るるを純門乃禁一打あると
均しく楯をも突以矢の一をも射を抜連る責らりらる
後りりりりの兵とあえり急地桂川先急湯淺田邊別當
山平判官す時支えり純門山の陣を崩されて阿瀬川
の城在田郡小町一と純門の城云々二條中納言隆俊純門山の軍

にうらまひて阿瀬川一落ぬ云々

善通寺安良村本尊阿彌陀如来

當寺まゝ龍門庵禪頭寺といひし應永二年春某の
從先運勝居士といふ人愚中大通禪師を平安より此地に
請してまゝと居せしむりて愚中庵と号し禪師は天龍
寺今宮宗憲圓師乃法寶後元朝に遊びて組禪を授け次故に
帰朝以素名をを皇國にせえ將軍義持公師範の乳とるに
其後寛永年中高野沙門快專師まゝ隠棲して生産
藤壱乃地横別善通寺なりかたふ源を慕ひて禪院寺と
善通寺と改めしとせ

茶臼山

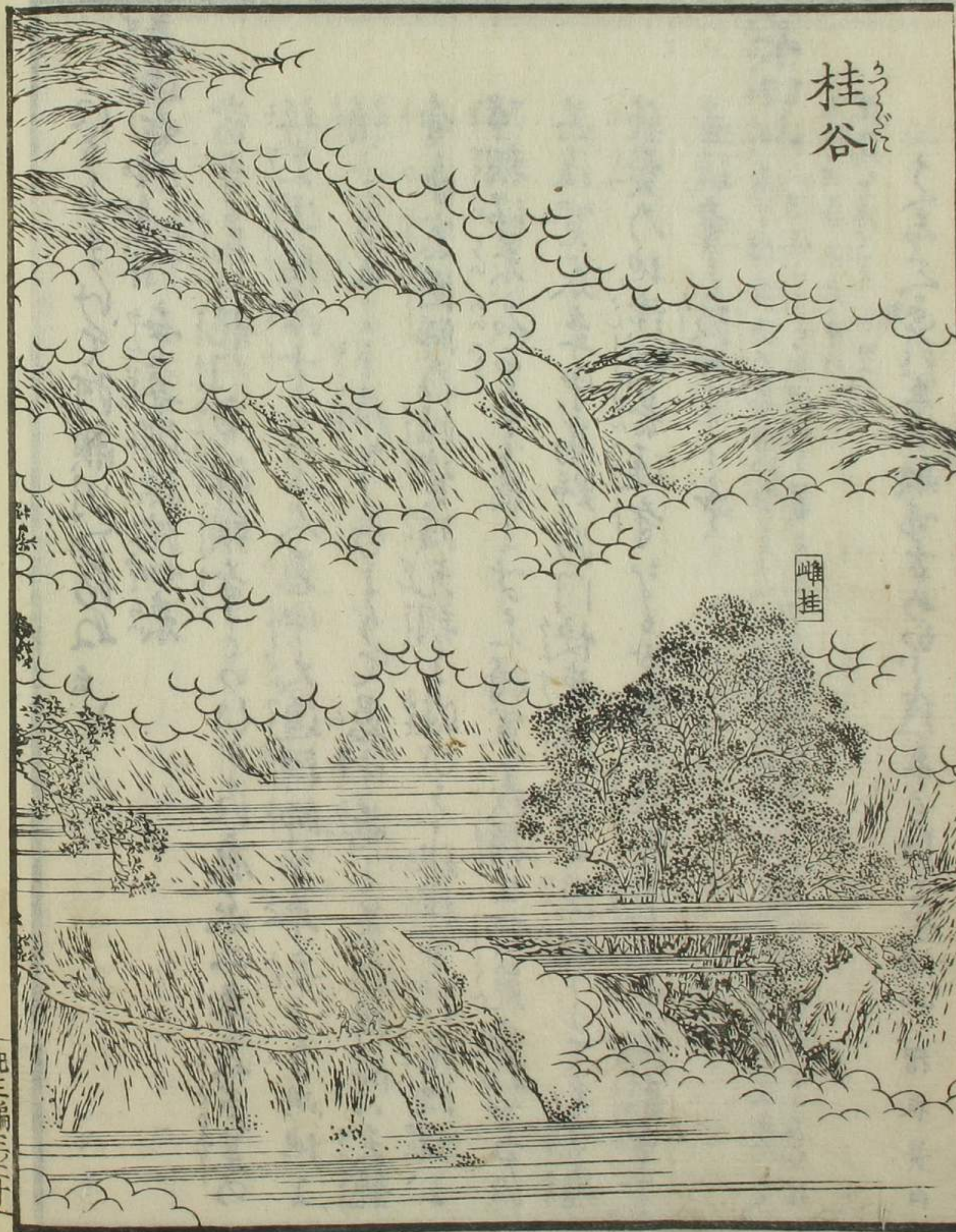
麻生津庄西乃勝村の南より河原織田右府を攻む時藤原左衛門
山信統もこれにけり山は麓に著せり先年をくまの城
林間を清くしとせ

くまの城軍小敵味方なり成るくまの茶臼山 摺衣黄白



桂

廣



桂谷

桂

廣

捕正成飯盛山の砦を攻むる図



真景

いづれか
こゝろ
こゝろ
こゝろ
こゝろ
こゝろ
こゝろ
こゝろ
こゝろ
こゝろ

三十一

鎌倉谷

同村の押しつり人家をさるる一丁許支崖崩立を待り十丈竹奔流巖脚の
因縁は赤崖草樹繁茂して中腹一乃を通り又押しつりつり一丁
許掛木の沖をさるる山石壁野路
平小して桂谷を通り又掛木の沖をさるる

桂谷

一里許りつり
鎌倉谷の危峻を經る百あして積聚するを踏踏する
要忽ら二箇の喬木つり西なるを雌雄といひ洞とありて東
より成雌雄といひ雌雄の大幹己より朽る粗を形を存する
その般圍根底より葉を生じ一叢數幹に分る雌雄の大こ
雌雄一係して同根十口入幹に分立し合せしを圍凡十丈
許笠管一匏小氣をかく天籟を響くとして啼小律呂の音を
為し二本の形状をまろに幹の花桐本れれ葉の錦葉と
似し稍圓なり夏は緑蔭天日をおひ秋は黄葉して満
堂金と布がやとりの歌英せざるいかに

鎌倉谷東峯見雌雄柱自註云里俗曰此木無花實

神易興

天謫雙桂樹居之鎌壑東因憂廢花節相對哭金風
百藥抽丹嶂千枝摩碧空妙姿人自賞莫想月宮中

因一とつとよんる長秋

諸平

兄の山ハ妹を〜
並〜い長き〜
清〜り〜
樹ハ枝〜
久〜
み〜
あ〜
の〜

飯盛山

竜門山乃東にあり麻生津村の南に飯盛山あり少く〜
少く〜
ハは月宮の附の一簇け山に城柵を構へ
挿成勅と奉りてを備はとつり

紀三編三ノ廿三

あつ〜
わ〜
の〜

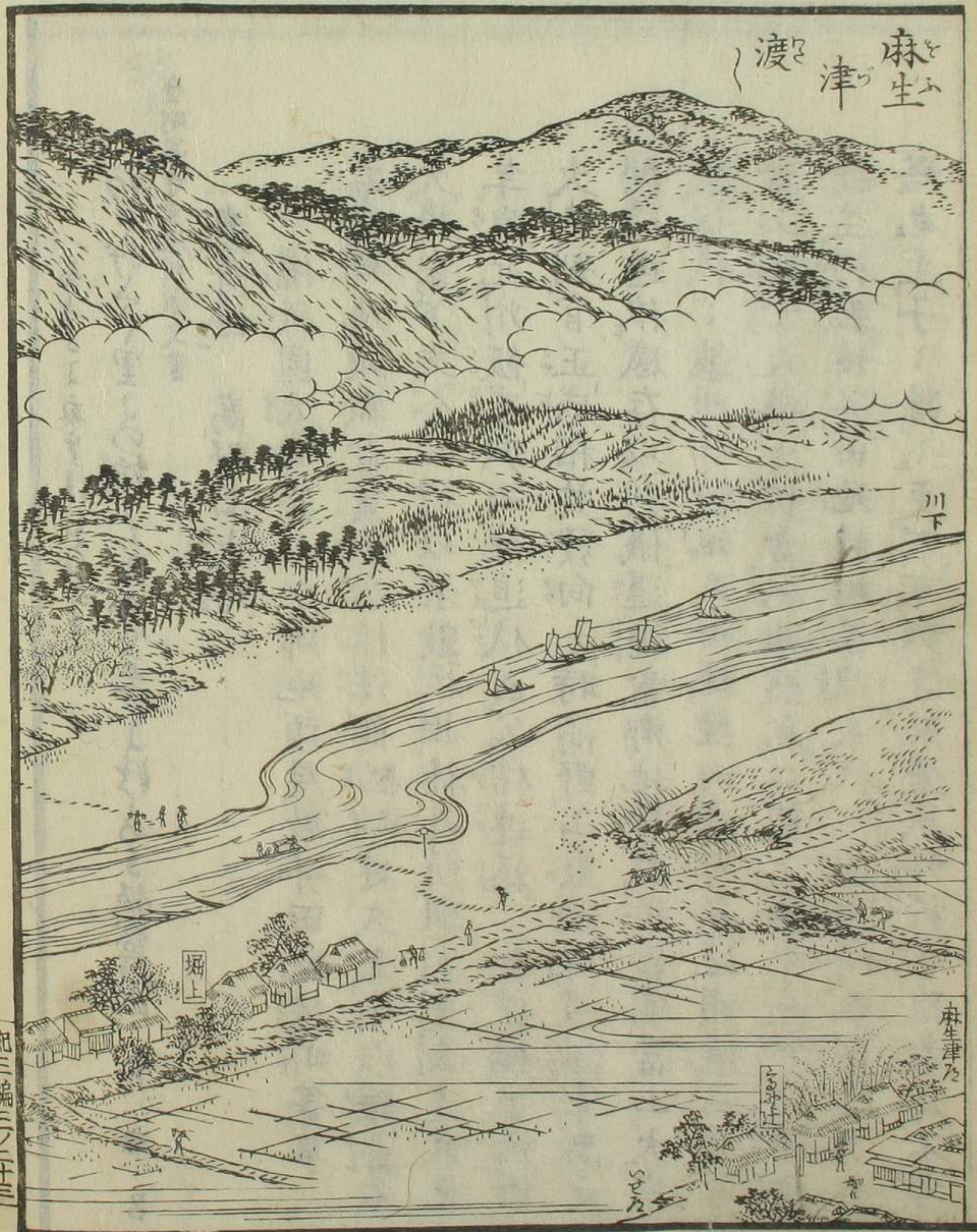
飯盛山 首麻呂

金剛峯寺宝庫所藏文書

奉寄進 高野山大塔

備後國太田莊山中郷地頭屋敷并田地陸町等事

右當郷地頭職者曩祖康信法師善信名建久年中以鎌倉右
大將家下文令知行以來數代相傳之所職也爰去建武元
年爲紀州飯盛城凶徒追伐父信連爲シテ 敕使楠木河内
大夫判官正成相共發向之時高野山衆徒殊被抽軍忠之
間信連依感存以別儀進進當郷地頭職於領家當山大塔
訖但代々墓所并敷地及田地陸町者可爲地頭進止之旨
當山雜掌又被出狀者也雖然爲二親出離生死資連現世
後生件敷地并田地陸町等限永代一圓重所奉寄附于大
塔也至子々孫々更不可致違亂若成妨於子孫者爲不孝



紀三編三ノ十五

不仁不可知行資連跡資連又悔返此 狀者

日本六十餘州大小神祇殊當山鎮守丹生大明神之御罰
於資連加身仁可罷蒙候仍為寄進狀如件

延元貳年十二月廿四日 左兵衛尉三善資連

麻生津郷 系麻生郷會あり多野山一又里府下

九頭社 郷中の産主神なり社敷備より九頭神八國之神と同一天正年中

麻生津渡 紀川の小舟を渡す

麻生津津 麻生津より登りて

志賀郷 麻生津津を越て清川の二村の地を行く

伊都郡 郷の間を越る

四村郷 満願寺の境より南に

星河村 内なる

出觀集

満願寺 志賀田村東西の境より南に登りて又下許小川の満願寺に今廢して
傍に弘法大師の石像を刻りて村
岩の水邊にありてわづれ滝と云ふ
四村郷 満願寺の境より南に登りて又下許小川の満願寺に今廢して
星河村 内なる

御所 星河村の南に登りて又下許小川の満願寺に今廢して
傍に弘法大師の石像を刻りて村
岩の水邊にありてわづれ滝と云ふ
四村郷 満願寺の境より南に登りて又下許小川の満願寺に今廢して
星河村 内なる

秋の夜、旅の宿をめぐりては、川を流るる水、
覺性法親王
時、所をめぐりては、川を流るる水、
覺性法親王
時、所をめぐりては、川を流るる水、
覺性法親王

姉乃女若くやびを紫や小萩花

雅真僧都墓

東志富田村田畝の中五輪の碑あり

僧都ハ高野中院河房の至弘法大師より第九世の法孺ニ
上意石山淳祐内供乃受法元果僧都の賢法なり後 朝廷
より高野山北貫主檢校職を賜ふ世師を以て権輿とい野
山ハ時畢方の冥夜に及び誓天誓地里小後任し終に故
よ世小天野乃檢校と稱し妻くハ勸教信公集及野峯名
徳傳号し出川

蟻通明神社

同村御所の南傍にあり

奉社

大明神 蟻通明神

末社

勸教

狗狗

玉柱の肉奉社に在りしは天祥様又天祥の自然石

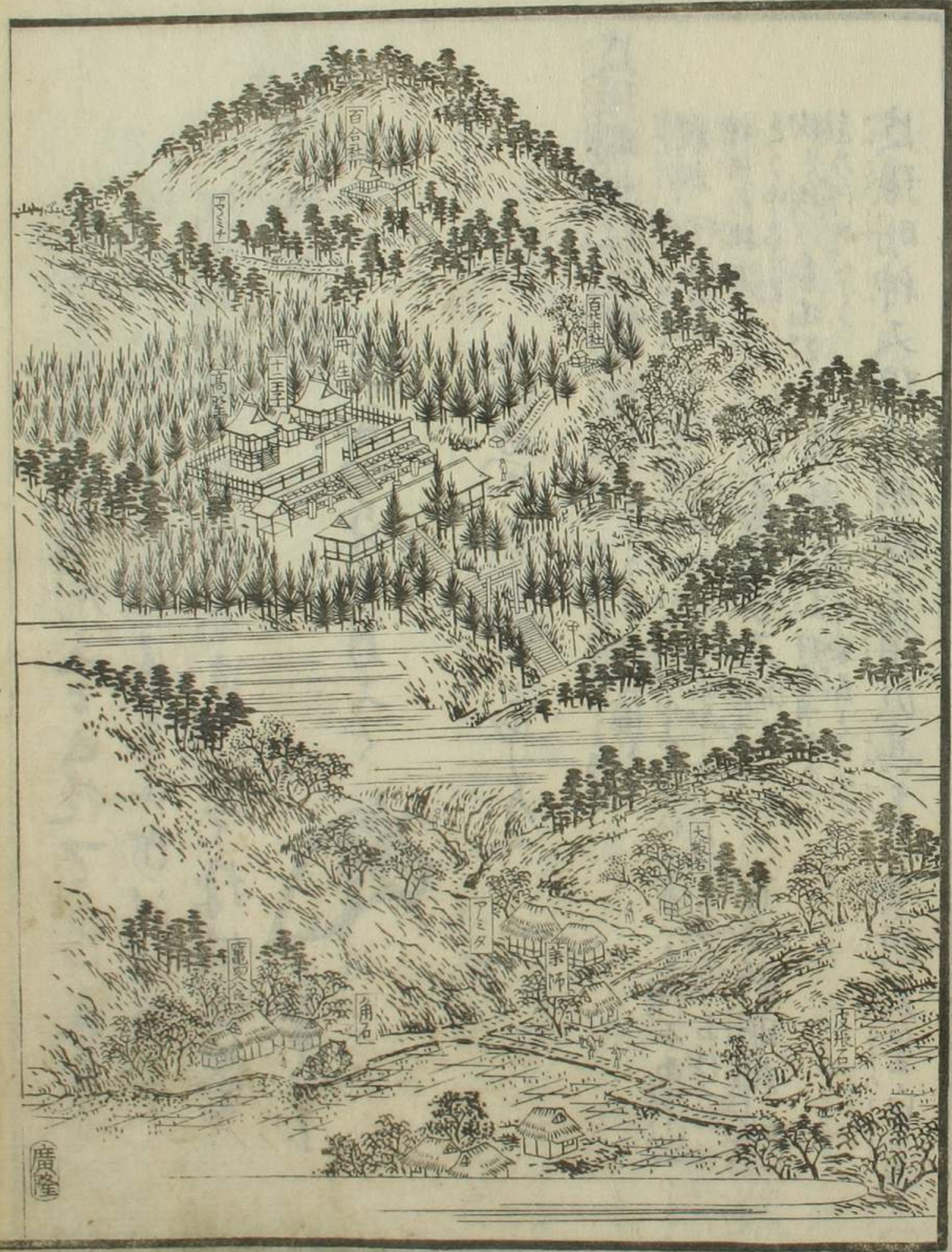
當社蟻通明神ハ 天武天皇白雉二年吳國の帝我日本ハ
君子困とせば智を試んとて七曲の玉を献し緒を以て
返らんす成乞ふ諸卿を計策を知るものなり

紀三編二七七

志富田氏

同村に在り今清九希とい
所藏の文書あり記を

老のそとて成得く山蟻を我先腰り糸を付く玉の
はよりひ色先の出はし密紙塗るをうらばを密紙香を
食て玉糸を通しり 叡威の餘何者ぞと問ふせ
終りり言の秋成紙とて消失ありそれよりそ人と蟻
通明神を崇め祀まるとあん然れども此地に勧請す
時代詳ならず弘安年間象古禁裏の時此神靈大に官
軍を助を給ひ 朝廷より奉祀賽ありといひ傳ふ社
前石造乃物物りりは是下成を付時と胞瘡甚壯
とて貴族小児を誘く多道でうねいなり是蟻乃七曲
れ玉を速に扱むり一因縁ふよありとて
佛經より又清少納言記ありしは今も伝ひしは
天智社に應文書あり 志富を蟻通明神といはれしは
と伝ふといふ是れいしを蟻
通ひ名此の各名と地なり



廣隆


皮張明神社



今
その
その
あら
其の
橋中

一紀三編三ノ廿八

廢寺の坐向周之百石後之内に遷り
 紀州之也の同早馬島山所流石
 池の上棟雲雲矣塞道と云了傳作凶後と
 如子傳

建武四年四月一


足利尊氏公草名

志留田兵衛大守

皮張明神社 淡田村の東南二十餘町皮張村より

紀神 丹生明神
 皮張石 社地の側山より一石あり長一丈許石面新し
 烏帽子石 形烏帽子
 百合野明神社 社地の真
 皮張明神又將場明神と稱し其兄 景行天皇皇子大

紀三編三ノ廿九

難命より出たり其濃國年義公乃後裔なり 應神天皇
 皇の所宇較ありて備前國津野郡より奉國に來り此
 地ニ居住して較世榮康を獵る丹生明神ニ傳むる瓜
 穢といひ明神の世ふありて田獵の途中弘法大師ふ龜を
 言野山の地ニ導引とて後弘仁五年又月日病ニ罹りて
 死を皮張乃百合野に葬る大師を導引する切河を以て
 以て皮張明神と紀すと云ふ皮張といひ將場といひ皆
 田獵小より名なり

鎌八幡 淡田村道傍より
 標の本木の園に傳作りて瓜崇まると云ふ鎌八幡と
 稱し奇瑞は方々著く鎌を打ち祈願する者年々盛
 りなり成就と云ふは鎌樹中に入ると次第に深く成就せ

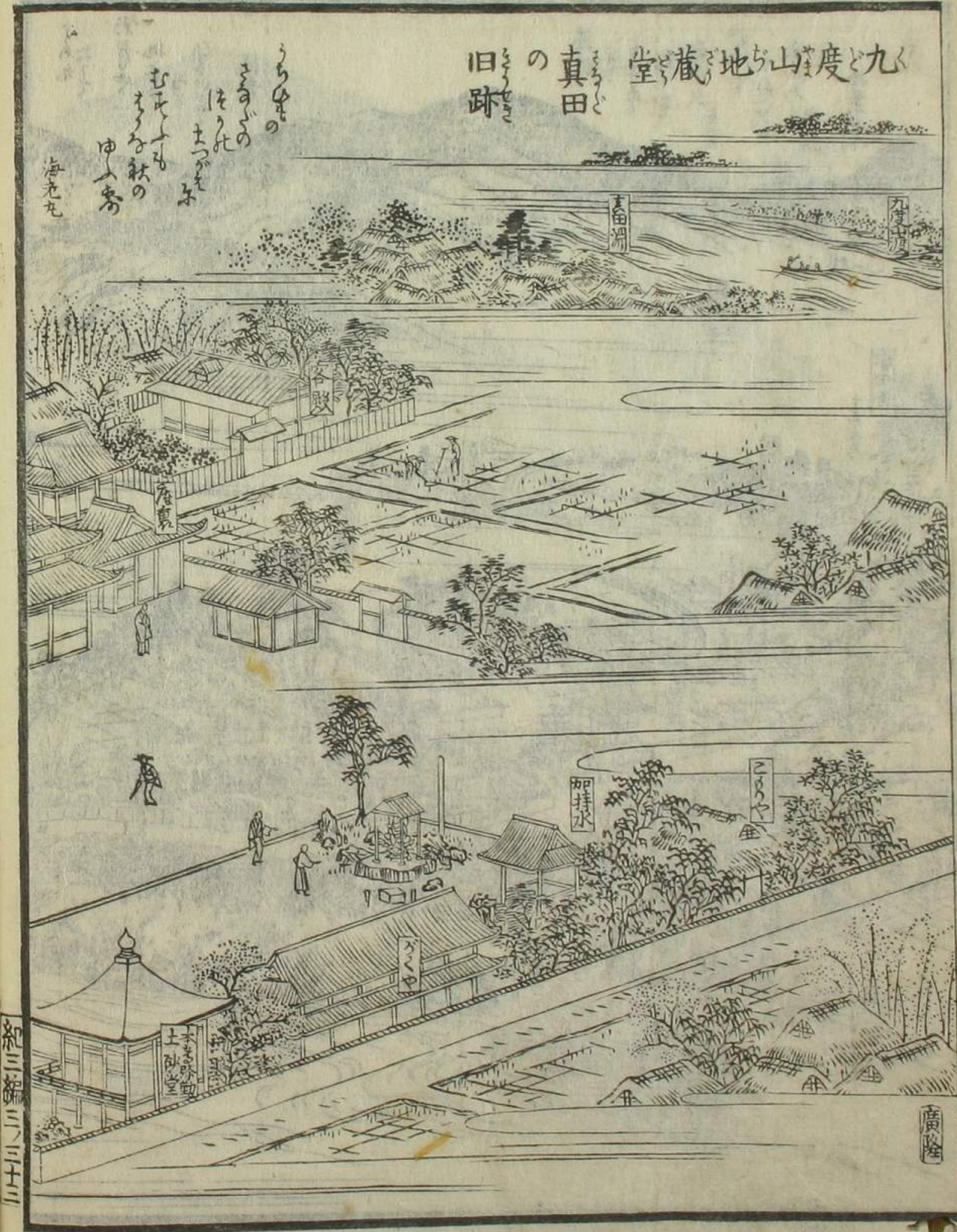
ざけいおとりのとも終る落の即往あり強を帯びも
 のりり千々繩小大小あり或は一挺ありハ千挺あり
 随く是代々のハ一挺あり枝葉も少く背蕙とて
 繁茂を根幹より二丈より此際強を帯び多義乃如
 一奇本といふべし

伊都郡兄井村鎌八幡記 仁井田好古

造化之理鬼神之跡交錯糾紛非智力之所得而測而威
 福祥殃不可得而誣焉則尊奉惟虔焉耳亦安暇求其所
 以然之故哉伊都郡兄居村高野管内也其地有神稱鎌
 八幡無祠宇以一大概樹為神像相傳神元在讚岐國屏
 風浦以旗與長鉤為神像長鉤俗呼熊手此 神后征韓
 之日軍中所用祀以為神云弘法大師開高野山以為隱
 棲修禪之地神追至于茲土人取而寄之楮樹然後告於
 野山僧來而迎神以祀諸山上今所謂熊手八幡是也
 其寄神於楮樹僅數日神靈遂憑此樹能為威為福祈禳

紀三編三十三





九度山地方蔵堂の真田の跡

うらやまの
まのの
ほつれ
まのの
むすしゆ
まのの秋の
ゆんあ
海老丸

徳久とて流るる氏子の海殿にありておのやあけの玉垣

慈尊院 并に巻大門の

榎尾山明神社 村の印縁にありて榎尾山と稱せしむる也

善名稱院 日村よりありて

○什寶 安房守船幕一張 船幕及船三幅は船幕と稱せしむる也

鐘一具 本堂に懸て ○鎮守地主権現 真田昌幸 墓印の松 墓にありて

夫人傳くより真田安房守昌幸并に左衛門尉幸村岡居

乃地なり慶長年中昌幸此地に死し葬地今も幸村小

徹然として宝篋印塔を建てり傍に幸村乃石像あり幸

村討死の後より夫人等寺を造りて善名稱院といふと我

然も今に真田屋敷此名を存し 夫人又真田氏岡居乃

今のも田細乃 時組織を襲ていひて

聖徳なること

真田松穴 日村丹生川の東崖にあり

學文路村 并に巻不動坂の條にあり

丁田村 同上

清水村 同上

三軒茶屋 同上

政年中納言秀信卿墓 向陽村若福寺に昔後石塔あり夫人秀信の墓といひ

黄門松貞桂融大居士慶長十三年七月廿七日と書せりは卿の墓にありて

遺したる去りては按じるとふも聖山光基院の法山ありはけ々の又稱れる儀あり

上回三郎文忌寸 上田郷の人なるべし

上回播磨守墓 初塚村の神よりり播磨守を擡正尚といふ初より隅田庄の地

頭職に補せりゆり隅田の一族ありて

糸の細道 初塚村の東に細谷川ありてそ若小柳の橋を糸の掛橋といひ

車や大踏も糸の細道をかへりてふりてやとけき 橋園

谷奥深村 東大和谷野郡

郡の東南隅乃幽谷に入る多岐里村落茶研の産居
るが如く人物質朴奇鳥多鳴して實に仙境とも云べ
る地なり田邑枇杷林を有る千石株満開の山あり
天紅霞に輝く水狸血を流して奇勝哉堂外に懸く
以然ととも人跡絶く是誠賞を致すの地なり若し
溪泉の源流を探るむ者八只武陵の一滝又けり

過谷奥深

神易興

鶯語引過幽谷春每逢佳景覺詩新長生欲學桃源裡

試問家々秦代人

志賀谷筋

府下より志賀谷筋を登りて津波を渡りて溪淵を渉る
志賀野郷 志賀谷筋又友淵筋といひ一を長谷と云ふ又神聖谷筋なり
あり又ヶ村に分る

島山高政末裔

村に居り今柳屋と名付たり其の子政慶正田郡石
敷の子左衛門尉民惟を以てて子孫に傳へては政慶民於大補政

龍光山醫王院金剛寺

本尊藥師如來

護摩堂

鎮守三社

春日 八王子

當山の本草茶師指瑞光妙薬の靈驗神々其の諸病消除
乃神聖歟ふより慈海の浴を浴生性本梳の齒を引
ぬく就中患眼れ業大り是を伝作し有り醫療の及む
ざれ盲目の類もて爰に集いし神園を有る其地は
者ハ沖堂の菴も多し一は新玄とれむ十は八九は平庵
せばといふ事や一因り近郷ハ更なり遠郷よりも来訪し
る暇後より東陸に在る中で銜口の響絶くもかゝりて
初歩を運ぶ業伽持の竹筒に盛りあふれ成る事下
向し沖名を唱へて目を洗ふし必利益成得とるむ



絶三編三三六



廣隆

六三三番

吉園能可民
 毎夜如月の
 知於民神
 の社ありて
 左の堂の式
 をあはれし



六三三番





山
 中
 之
 景
 也
 此
 山
 中
 之
 景
 也
 此
 山
 中
 之
 景
 也

友淵の細野の真國



三
 十
 三
 三
 三
 三

廣隆

志賀郷

友朋郷の上流

下司表六祠

後多那帝... 宣平... 宣平... 宣平...

此至剛... 宣平... 宣平... 宣平... 宣平...

文治五年八月十八日

宣平判

丹生高野明神

大橋 志賀谷川... 梨木...

紀三編三四十二

花坂

長谷谷筋

神野郷

産物神野紙

河野城墟

十三社明神社

祀神

藏王権現社

ついで申...

楮多... 隣... 里...

花友



満福寺 市邊村 本尊十一面観音 聖徳太子の御成りけ依今の佛之此製す
る所より大ふ疑なり勝立は天までも又た

霊池 今田とあり 古鐘 結

備福寺

紀伊國那賀群高野山 寺領内神野庄

正平十三年 戊戌 九月三日 願主放阿旃

當寺ハ 光仁天皇此宝龜元年唐の青龍寺の威光ハ
為光ト 上人乃開基トシテ意ハ神野寺トシテ郡中此在刹之
上人萬里の波濤を凌ぎテ本國ニ渡リ古俗を引接シ
佛法を興隆せんトシテ此名草郡紀三井寺及敷箇寺
を草創セシト當寺も其一なり建保元年の文書ハ見
えり上人先此地形を平々ト地を作り農業を興く去
人于徳ノ懐ニ旅思の爲り力を盡シテ寺塔城造シ
とあり其遺蹟を諸國にも佛國にもなるなりト云は民間の

崇教も大なる形ト云々ト云い佛ノか所意地なれども
今ハ衰廢シテ是れ佛ノも知るその稀なり地も
威光上人乃名々拾芥抄に云々云々の事多傳記
これども古文書多不授也本國トテ寺院を造立
始程ト云い云々

金剛寺 大角村より本誓山高祖殿ト云い熊野権理
猿川郷 作書の上流ト云い

高野道中徑猿川郷 木村毅

層巒回抱猿川郷 樵徑藏溪一線長 傾棧未修過日雨

時々酸慄破詩腸

熊野十二社権現 田村より郷中

○田村將軍石塔 將軍の地より石塔を造りて善徳
是將軍に由緒
あると云ふ也



紀三篇三平六

廣隆

神山 新田村より毎年十一月十六日の夜天竺の神を奉りて神を
代りて捧ぐるありは長谷村の所民に送りて通河の里に奉りて一人も
門戸を

高野山 高野山に丹生寺あり大正神あり社地を楮皮乃杜と号し去人傳へ
考元天皇の御宇武徳天皇命奉國小寺ありあり地楮皮を去り始
る紙を製せしむるなり ○神主高野山に家あり天竺寺あり元曆御
をいへりしとせん

鐘樓 銘

高野山延壽院

奉施入鐘一口

爲僧照禪僧聖庵源時房

尼妙法兼法界衆生也

安元二年二月六日

勸進入唐三度聖人重源

願主尼大覺

北又郷 北ケ村よる東又丁件より
東又乃東又丁件

若子岩 北ケ村より東又丁件より
北ケ村より東又丁件

黒河津 丁豊を隔ちて登嶺あり下山の時を千の院谷より物とす此の西
を越られ

摩尼郷 十ヶ村より東又丁件より
北ケ村より東又丁件

宿摩尼村

崖熊野

孤身一自委蓬飄投迹天涯臥唯嶢流水哀鳴勞夢苦

暗燈影冷使魂消閑庭倚樹強吟詠傍岸鄰家入寂寥

彷彿疏鐘聞不過南飛鳥鵲喚晴霄

扶藪 北ケ村より東又丁件より
北ケ村より東又丁件

夷曲高野詣

杖の藪を佛を引くははらうとぞ秋原の鳴玉川舎

傳供本 或ハ備置し天物本ハ紙ハ和剛者那乃響ありて
或ハ備置し天物本ハ紙ハ和剛者那乃響ありて

麻小して林を渡けりありとそい少く女流扶藪場あり

的場山

高野明神御夜に壇上り
此山へ弓を射あまると云

陣ヶ峯

寛正元年島山兵衛内膳山を討てり
此山より入る流石を築き
いふ城八里道支所より二ににりて
奥院に陣取り時乃を成上り
奥院に陣取り時乃を成上り
奥院に陣取り時乃を成上り

桜峠

奥院に陣取り時乃を成上り
奥院に陣取り時乃を成上り
奥院に陣取り時乃を成上り

宿の温泉

又村の小名者村より
温泉に湯を汲みて
温泉に湯を汲みて

筒香郷

穴一居むらむら
筒香人住むらむらの
賢九

雨乞峯

筒香郷の東にあり
筒香郷の東にあり

七虎峯

筒香郷の東にあり
筒香郷の東にあり

明神岩

筒香郷の東にあり
筒香郷の東にあり

富貴郷

筒香郷の東にあり
筒香郷の東にあり

名迫明神

筒香郷の東にあり
筒香郷の東にあり

藤白峯

筒香郷の東にあり
筒香郷の東にあり

湯川郷

筒香郷の東にあり
筒香郷の東にあり

天狗嶽

筒香郷の東にあり
筒香郷の東にあり

小寺の松

筒香郷の東にあり
筒香郷の東にあり

花園郷

筒香郷の東にあり
筒香郷の東にあり

此地ハ

高野山雲海の香花に
徳を献供せ

水源高野山谷
 上より四十八ヶ
 所の滝と涇々
 峯國在田川を
 涇々紀の海に
 入る



大瀧

甲和

今時天帝釋白佛言世尊是善男子善女人
等云何覺知於此三千大千世界及餘十方

以下略之

同卷與書

竊以昔河東化主諱万福法師也行事繁多但略陳耳其稿
撰之近於曠河般若之願教於後身此始天平十一年迄來
十二年冬志未究畢迹僱松嶺是以改造洪橋花景禪師四
弘之願教於寶橋一乘之行繼於般若弘道于汎誨良久良
母于茲吾家原邑男女長幼幸預其化心託本主謹敬加寫

紀三編三五二

大般若經二帙廿卷繕已畢此第四十三帙并第五十二
帙也仰誓辱捧一豪之善咸報四恩之重伏願人賴三益
之友家保百年之期廣者少善餘祐普及親疎自他相
携共遊覺橋 奉仕知識馬首定主賣

天平敕寶六年九月廿九日

第四百廿五之卷與書文同上畧之

奉仕知識牧田忌寸玉足賣

天平敕寶六年九月廿九日

大股若波羅密多經卷第五百廿三



河內
由上於福院常任也

同卷東也

延喜十二年推檢非遺使高屋梁蔭依廣宣奉寫

紀伊國名所圖會三編卷之三終

紀三編三五十三

